

論 文

女子大学生における居場所感覚の基底にある
心理学的機制の探索(Ⅲ)

——高校時代の自尊心と過剰適応傾向の影響——

¹諸 井 克 英 ²湯之上 葵 ³板 垣 美 穂¹同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・教授²同志社女子大学大学院・生活デザイン専攻修士課程2014年度修了³同志社女子大学大学院・生活デザイン専攻修士課程2012年度修了The Exploration of Psychological Mechanism Underlying
Ibasyo Feeling in Female Undergraduates(Ⅲ):

Effects of self-esteem and over-adaptation in the senior high-school days.

¹Katsuhide Moroi ²Aoi Yunoue ³Miho Itagaki¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor²Life Style Design Studies, Graduate School of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2014³Life Style Design Studies, Graduate School of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2012

Abstract

The present study explored the effects of self-esteem and over-adaptation in the senior high-school days on the expectancy of "ibasyo" feeling after college admission. Female freshmen reminisced about self-esteem and over-adaptation in the senior high-school days and imagined "ibasyo" feeling during the second year at university. Self-Esteem Scale(Rosenberg, 1979) and Over-Adaptation Scale(Ishizu & Ambo, 2008; Moroi *et al.*, 2015) were revised to measure the reminisced state in the senior high-school days. Furthermore, "Ibasyo" Feeling Scale(Kishi & Moroi, 2011) was revised to measure the expectancy of "ibasyo" feeling during the second year at university. These scales were administered to female freshmen($N = 413$). By the factor analyses(likelihood method with promax rotations), three factors for Over-Adaptation Scale and four factors for "Ibasyo" Feeling Scale were extracted, though those factors were a little different from the ones found by the previous studies. According to the covariance structure analysis, over-adaptation deteriorated self-esteem in the senior high-school days, and self-esteem heightened the expectancy of "ibasyo" feeling during the second year days at university. The significance of research in psychological mechanism underlying "ibasyo" feeling was discussed.

Key word: "ibasyo" feeling, over-adaptation, self-esteem.

I. 問題

湯之上・諸井(2016)は、大学という新たな環境に直面した際に生起する過剰適応傾向がその後の居場所感覚の形成や自尊心の維持・高揚に果たす役割を明らかにするために、大学2年次以降の女子大学生を対象とした実証的研究を行った。過剰適応とは、「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」(石津・安保, 2008)である。新たな対人関係の構築という課題に直面する初期適応時には自分が他者から受容・拒絶されているかに関する主観的指標である自尊心が曖昧になり(Leary & Baumeister, 2000)、過剰適応傾向がより活性化すると考えられる。

湯之上・諸井(2016)による研究では、大学入学初期の過剰適応傾向(1年次の4～5月頃を回顧)、測定時点(2年次以降)の大学生活における居場所感覚と自尊心がそれぞれ測定された。共分散構造分析によって以下の知見が得られた。①大学入学初期の過剰適応傾向の高まりは、大学生活での肯定的な居場所感覚の形成を妨げるとともに、自尊心も低下させる、②大学生活での肯定的な居場所感覚の形成は自尊心を促進する。

ところで、過剰適応傾向は、当該個人が特有にもつ傾性的側面と、新環境への直面に伴って喚起される一過的側面に区別できよう。したがって、諸井・坂上・野島(2015)や湯之上・諸井(2016)の研究で居場所感覚や自尊心への過剰適応傾向の影響が認められた原因として次のように考えられる。諸井らでは入学後半年以上を経過した女子大学生の測定時点での過剰適応傾向(測定時点での状態)、湯之上・諸井では大学入学直後の過剰適応傾向(回顧した状態)をそれぞれ対象としている。この2研究での過剰適応傾向は、いずれも大学環境という枠組みの中の状態である。したがって、先述したような一過的側面だけでなく、大学環境と関わりなく当該

個人がもつ傾性的側面も反映されると予想される。しかし、大学入学前の環境すなわち高校時代の過剰適応傾向を測定した時には、高校時代の過剰適応傾向は大学での居場所感覚の形成と無関係かもしれない。つまり、大学入学後には高校時代の過剰適応傾向のうちの一過的成分は持ち越されないからである。回答者がもつ傾性的側面としての過剰適応傾向に大学という新たな環境に対して喚起された一過的成分としての過剰適応が付加されるからである。

以上のことを勘案して、本研究では、大学という新環境への移行直後の新入生を対象として、高校時代の自尊心や過剰適応傾向が大学環境への適応をほぼ終えた時期の居場所感覚形成の期待におよぼす影響を検討した。

高校時代の自尊心や過剰適応傾向については回答者に「高校2年生」の頃の状態を回顧させた。評定対象時期をこの時期にした理由は以下の通りである。「高校1年生」の時期は、高校生活への適応を強いられる時期であるとともに、志望校に入学できたかどうかによって、自尊心が変動傾向にあると推測される。また、「高校3年生」の時期は、進路決定をする学年であることに加え、進路希望の可否可能性のために自尊心が揺らぐと思われる。これに対して、「高校2年生」の時期は、入学後1年を経過しており、全体的には高校への適応をほぼ完了していると判断できる。そのために、定常的な自尊心を測定するために適切な時期であると考えられる。また、過剰適応傾向についても、「高校2年生」の頃には、新たな環境への適応もほぼ完了し、環境に対する適応水準も安定していると推測できるために、この時期が適切と判断した。

大学における居場所感覚の形成期待の場合には、自分自身が「大学2年生」になった頃を想像させた。後述するように調査実施時期が4月であることから、調査時点での居場所感覚はまだ十分に形成されていないと思われる。また、「大学3年生」の後半から通常卒業後の進路に関する意識が顕在化し始める。さらに、「大学4年生」の段階になると、進路決定への活動が

活性化するとともに、学業面でも基本的に卒業研究に絞られる。つまり、大学という環境が生活の中心ではなくなると推測できよう。対照的に新環境への適応をほぼ終えた「大学2年生」の頃が大学という新環境で形成される居場所感覚を新入生がどのように期待しているかを測定するために適切な評定対象時期と判断した。本研究の仮説は以下の通りである。

大学入学後半年間以上経過した女子大学生を対象とした諸井ら(2015)の知見に基づく、過剰適応傾向の高まりは自尊心を低下させる。これを「高校2年生」の頃に適用すると、以下の様になるはずである。

仮説Ⅰ：高校2年次の過剰適応傾向は、高校2年次の自尊心に負の影響をもたらす。

先述したように、高校2年次の過剰適応傾向はその時点で直面している状況によって喚起される成分が大きいはずである。そのため、新たな環境である大学でどのように居場所感覚が形成されるかという期待には影響をおよぼさないと予測される。

仮説Ⅱ：高校2年次の過剰適応傾向は、大学2年次の居場所感覚期待に影響をおよぼさない。

高校という新環境への初期適応をほぼ終えた高校2年次の自尊心の水準は、回答者固有の安定した水準を表していると推測できる。大学という新たな環境に直面した新入生では、高校2年次の自尊心が高ければ、新たな環境である大学においても肯定的な居場所感覚が形成できると期待するはずである。

仮説Ⅲ：高校2年次の自尊心は、大学2年次の居場所感覚期待に正の影響をもたらす。

以上の仮説を検討するために、大学入学直後(4月)の女子大学生を対象として質問紙調査を実施した。なお、対象とした大学が2キャンパスから構成されることを踏まえて(諸井ら, 2015; 湯之上・諸井, 2016), 付加的に今回の調査では学科間の比較(人間生活学科, 社会システム学科, 現代こども学科)も試みた。

Ⅱ. 方法

質問紙の実施と対象

同志社女子大学での社会心理学(京田辺キャンパス)および生活環境(今出川キャンパス)の講義を利用して、質問紙調査を新入生に実施した(2014年4月21日〈今出川〉, 24日〈京田辺〉/2015年4月20日〈京田辺〉)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。

人間生活学科, 社会システム学科, および現代こども学科の新入生に限定し、青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、以下の尺度に完全回答した新入生413名を分析対象とした(2014年: 人間生活学科89名, 社会システム学科73名, 現代こども学科46名 / 2015年: 社会システム学科146名, 現代こども学科59名)。平均年齢は18.12歳($SD=.34$, 18~20歳)であった。

質問紙の構成

質問紙は、①高校2年次の自尊心尺度、②高校2年次の過剰適応傾向尺度、③回答者の基本的属性、④大学2年次の居場所感覚期待尺度から構成されている。

(1)高校2年次の自尊心尺度

大学新入生である回答者に「高校2年生」の頃を回顧させ、自尊心を測定した。評定対象時期をこの時期にした理由は先述した通りである。

Rosenberg (1979) の自尊心尺度(諸井, 1995a)の各項目を、「高校2年生」の頃の自分に対する肯定的評価の程度を測定するように改変した(表1-a 参照)。「高校2年生」の頃を回顧させ、10項目それぞれについて回答者にあてはまる程度を4点尺度で回答させた(「4. かなりあてはまる」、「3. どちらかといえばあてはまる」、「2. どちらかといえばあてはまらない」、「1. ほとんどあてはまらない」)。

(2)高校2年次の過剰適応傾向尺度

自尊心と同様に「高校2年生」の頃の過剰適応傾向を測定した。前述したように、この時期は環境に対する適応水準も安定していると推測

できる。

このために、石津・安保(2008)に基づいて諸井ら(2015)が用いた26項目を対象に「高校2年生」の頃の様子を回顧させる項目に修正した(表1-b, 付表1-a 参照)。回答者が「高校2年生」の頃に感じていた気持ちを回顧させ、各項目があてはまる程度を4件法で評定させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

(3)回答者の基本的属性

所属学科などの基本的属性に加え、高校の卒業年度を尋ねた。その理由として、先の(1)や(2)では「高校2年生」の頃を回顧させるが、現役入学者の場合、「高校2年生」を想起するのは1年前、非現役入学者の場合は2年以上前のことになる。つまり、現役入学者と非現役入学者で想起時期からの経過時間に差が生じることから、回顧に影響する可能性が考えられる。そのため、回顧に伴う経過時間の差異の影響をチェックする必要があるからである。しかし、今回の回答者のうち同定された非現役入学者は19名にすぎなかったため、この検討は行わなかった。

(4)大学2年次の居場所感覚期待

大学新入生が、新環境である大学においてどのように居場所感覚が形成されるかという期待の程度を測定した。このために自分自身が「大学2年生」になった頃を思い浮かべさせた。評定対象時期の設定理由については以下の通りである。調査実施時期が4月であることから、新入生では調査時点での居場所感覚はまだ十分に形成されていないと思われる。また、「大学3年生」の後半から卒業後の進路に関する意識が顕在化し始める。さらに、「大学4年生」の段階になると、進路決定への活動が活性化するとともに、学業面でもおおむね卒業研究に絞られる。つまり、大学という環境が生活の中心ではなくなると判断される。対照的に新環境への適応をほぼ終えた「大学2年生」の頃が大学という新環境で形成される居場所感覚を新入生がどのように期待しているかを測定するために適切

な評定対象時期と判断した。

このために、岸・諸井(2011)が測定時点での居場所感覚を測定するために作成した尺度項目を改変した。60項目それぞれを「大学2年生」の頃の居場所感覚期待を表すようにした(表1-c, 付表1-b 参照)。回答者が「大学2年生」になった頃を想像させ、各項目があてはまる程度を4件法で評定させた(「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお、以上の3尺度それぞれでの評定順の効果を次のようにして相殺した。高校2年次の自尊心尺度では1頁の前半と後半で項目を入れ替えた2種類の質問紙を用意した。他の2尺度については尺度ごとに評定用紙を頁単位(高校2年次における過剰適応傾向尺度3頁; 大学2年次の大学における居場所感覚尺度6頁)で無作為に並び替えた。

Ⅲ. 結果

各尺度の検討

(1)分析の手続き

各尺度について、まず尺度項目ごとに平均値の偏り($1.5 < m < 3.5$)と標準偏差値($SD \geq .60$)のチェックを行い、不適切な項目を以下の分析で除外した。次に、過剰適応傾向尺度と居場所感覚尺度については先行研究で多次元性が仮定されているので、因子分析(最尤法, プロマックス回転($k=3$))を行った。まず、初期解での初期共通性($\geq .25$)を確認したうえで、初期因子固有値 ≥ 1.00 を満たす解をすべて求め、プロマックス回転後の負荷量 $|.40|$ を基準に解釈可能な因子解を同定した。その際、①特定因子の負荷量が十分に大きく(絶対値 $\geq .40$)、②他因子への負荷が小さい(絶対値 $< .40$)という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで反復した。最終的に、因子負荷量に基づき下位尺度項目を選別し、信頼性チェックを行った上で構成項目平均値を下位尺度得点とした。

単一次元性が仮定されている自尊心尺度では、得点が高いほど自尊心が高くなるように得点を

表1-a 高校2年次の自尊心尺度に関する単一次元性の検討

		[未回転第Ⅰ主成分負荷量] ^(a)		[相関分析] ^(b)	
		－1回目－	－2回目－	－1回目－	－2回目－
se_h2_a_1	私は、全体として、自分自身に満足していた。	.70	.70	.58	.59
se_h2_a_2	私は、ときどき、自分にはまったくよいところがないと思っていた。	*	.68	.57	.57
se_h2_a_3	私は、たいいていの人と同じくらいには、だいたいのことをうまく行えていた。		.53	.40	.43
se_h2_a_4	私は、自分には自慢できるものがあると感じていた。	*	.64	.53	.53
se_h2_a_5	私は、ときどき、自分が役立たずだとはっきりと感じていた。	*	.71	.61	.60
se_h2_a_6	私は、ときどき、自分にはよいところがたくさんあると感じていた。		.62	.49	.52
se_h2_b_1	私は、自分は少なくとも他の人と同じくらいの価値がある人間だと思っていた。		.69	.57	.59
se_h2_b_2	私は、もっと自分を尊敬できたらと思っていた。	*	.30	****	****
se_h2_b_3	私は、全体として、自分が人生の失敗者だと思いがちであった。	*	.67	.57	.55
se_h2_b_4	私は、自分自身に対して前向きな態度をとっていた。		.70	.59	.59
		40.25%	43.94%	$\alpha = .83$	$\alpha = .84$

N=413

*: 逆転項目

(a)主成分分析における第Ⅰ主成分負荷量と第Ⅰ主成分説明率

(b)当該項目得点と当該項目を除く合計得点とのピアソン相関値とCronbachの α 係数

調整し、主成分分析での未回転第Ⅰ主成分負荷量(絶対値 $\geq .40$)を基準に不適切な項目を除去した。最終的に項目-全体相関分析と α 係数値により単一次元性を確認し、項目の平均値を尺度得点とした。

(2)高校2年次の自尊心尺度

10項目すべてで項目水準での分析は良好であった。自尊心が高いほど高得点になるように逆転項目5項目の得点調整を行った。10項目を対象とした主成分分析では、se_h2_b_2が未回転第Ⅰ主成分負荷量およびこの項目を除く合計得点との間のピアソン相関値が低かった。この項目を除く9項目を対象にすると、不適切な項目はなく、どの項目の負荷量や相関値も高かった(表1-a)。

(3)高校2年次の過剰適応傾向尺度

全項目が項目水準の検討で適切であると判断されたが、初期共通性が低かった($< .25$)1項目(over_h2_a_6)を除き分析した。2~5因子解が算出可能であり、明確な解釈が可能であった3因子解を採用した(表1-b)。この3因子は、石津・安保(2008)の3側面にほぼ対応していたので、それぞれ「Ⅰ. 自己抑制」、「Ⅱ. 他者配

慮」、「Ⅲ. 人からよく思われたい欲求」と命名した。

(4)大学2年次の居場所感覚尺度

項目水準の検討によって標準偏差値が低かった1項目(iba_u2_b_8)を除き($< .60$)、因子分析を行った。1項目(iba_u2_a_1)の初期共通性が低かったので($< .25$)、残りの58項目を分析対象とした。2~9因子解を検討したところ、4因子解が明確な負荷量パターンを示したので、この解を採用した(表1-c)。第Ⅱ因子、第Ⅲ因子、および第Ⅳ因子は、岸・諸井(2011)の結果と対応していたので、それぞれ「Ⅱ. 自己疎外感」、「Ⅲ. 精神的安定感」、および「Ⅳ. 自己没入感」と名づけた。第Ⅰ因子は、岸・諸井の「被受容感」と「自己有用感」が合体して形成されたので、「Ⅰ. 自己受容感」とした。

(5)尺度得点の検討

高校2年次の自尊心尺度、高校2年次の過剰適応傾向下位尺度、および大学2年次の居場所感覚期待下位尺度いずれも、①4得点当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値および②Cronbachの α 係数値の点でも十分な値を示した(表1-d)。したがって、尺

表1-b 高校2年次の過剰適応傾向尺度に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転($k=3$))の結果—因子負荷量—

	(a)	I	II	III
【I. 自己抑制】				
over_h2_a.8 高校にいる時には、私は、自分が思っていることを口に出さないようにした。	自	.79	-.03	.00
over_h2_b.4 高校の中では、私は、心の中で思っていることをまわりの人たちに伝えないことが多かった。	自	.78	-.01	-.05
over_h2_a.4 私は、高校の中では自分の気持ちを抑えてしまうほうだった。	自	.77	.02	.05
over_h2_c.3 高校の中では、私は、相手と違うことを思っている、それを相手に伝えないことが多かった。	自	.76	-.08	-.01
over_h2_b.8 高校の中では、私は、自分が考えていることをすぐには言わないようにした。	自	.72	.06	-.05
over_h2_a.9 私は、高校の中では自分の意見を無理に通すことはしなかった。	自	.54	.02	-.01
over_h2_c.6 高校にいる時には、私は、まわりの人たちの顔色や様子が気になるほうだった。	人	.44	.14	.33
【II. 他者配慮】				
over_h2_b.1 高校にいる時には、私は、まわりの人たちが自分にして欲しいことは何かと考えた。	他	.07	.75	-.14
over_h2_b.2 高校にいる時には、私は、まわりの人からの期待を敏感に感じていた。	期	-.03	.65	-.03
over_h2_c.1 高校の中では、私は、まわりの人たちからの要求に敏感なほうだった。	他	.06	.57	.09
over_h2_a.5 高校の中では、私は、自分が少し困っても、まわりの人たちのために何かしてあげることが多かった。	他	.08	.46	-.02
over_h2_c.4 高校にいる時には、私は、まわりの人たちの役に立ちたいと思った。	他	-.25	.44	.27
【III. 人からよく思われたい欲求】				
over_h2_a.7 私は、高校で知り合った人たちから気に入られたいと思った。	人	.04	-.08	.76
over_h2_b.7 高校にいる時には、私は、自分をよく見せたいと思った。	人	-.07	-.08	.67
over_h2_b.3 私は、高校で知り合った人たちから認めてもらいたいと思った。	人	-.06	.25	.50
over_h2_a.3 私は、高校で知り合った人たちに嫌われないように行動した。	人	.28	.06	.50
【因子間相関】				
	II	***	.19	.34
	III		***	.49

N=413

初期因子固有値>1.38; 初期説明率55.96%

 $\chi^2_{(75)}=140.42, p=.001$

(a): 石津・安保(2008)との対応< I. 他者配慮; II. 期待に沿う努力; III. 人からよく思われたい欲求;

IV. 自己抑制(「自己不全感」項目は自尊心尺度と重複するので利用していない)

度構成項目の平均値を求めることに問題はないと判断できた。

以上の分析で得られた尺度得点の分布について正規性の検定を行った(表1-d)。高校2年次の自尊心得点、高校2年次の過剰適応傾向下位尺度3得点、および大学2年次の居場所感覚期待下位尺度4得点いずれでも正規性分布からの有意な逸脱が認められた。分布の歪みの程度から許容範囲と判断した。

次に、平均値の検討を行うと、高校2年次の自尊心得点は尺度中性点(2.5)と異ならなかった。下位尺得点相互の平均値比較を行うと、高校2年次の過剰適応傾向では「I. 自己抑制< II. 他者配慮< III. 人からよく思われたい欲求」、大学2年次の居場所感覚期待では「II. 自己疎外感< I. 自己受容感≒ III. 精神的安定感< IV.

自己没入感」の有意な傾向が得られた。

諸測度得点に関する学科間の比較

高校2年次の自尊心、高校2年次の過剰適応傾向、および大学2年次の居場所感覚期待それぞれでの平均値に関する学科間(人間生活学科、社会システム学科、現代こども学科)の平均値比較を行った。自尊心では一元配置の分散分析を実施した。また、過剰適応傾向(3下位尺度得点)および居場所感覚期待(4下位尺度得点)ではそれぞれで多変量分散分析を行い、有意な効果が認められた場合に各下位尺度得点の効果を検討した(表2)。

高校2年次の自尊心と大学2年次の居場所感覚期待では学科間の有意な差異は検出されなかった。高校2年次の過剰適応傾向では3得点全体で有意な効果が見いだされ、下位尺度得点

表1-c 大学2年次の居場所感覚期待尺度に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転($k=3$))の結果—因子負荷量—

	(a)	I	II	III	IV
【Ⅰ. 自己受容感】					
iba_u2_b_10 大学には, 私を大切にしてくれる人がいるだろう。	被	.77	-.04	-.07	.10
iba_u2_e_10 大学には, 私のことを気にかけてくれる人がいるだろう。	被	.73	-.17	-.13	.01
iba_u2_e_4 大学には, 私と気持ちが通じ合う人がいるだろう。	被	.70	.06	.05	.07
iba_u2_a_9 大学に私がいないと, 困る人がいるだろう。	有	.67	-.02	.05	-.09
iba_u2_a_3 大学に私がいないと, さびしがる人がいるだろう。	×	.66	.03	.14	-.14
iba_u2_d_9 大学では, 私が支えとなっている人がいるだろう。	有	.65	-.02	.10	-.02
iba_u2_a_8 大学には, 私の悩みを聞いてくれる人がいるだろう。	被	.65	-.03	.12	-.03
iba_u2_a_2 大学には, 私を本当に理解してくれる人がいるだろう。	被	.64	.10	.21	.00
iba_u2_b_5 大学には, 私の存在を認めてくれる人がいるだろう。	被	.62	-.15	.02	.06
iba_u2_f_6 大学では, 私のことを必要とする人がいるだろう。	有	.58	-.09	.10	-.01
iba_u2_b_6 大学には, 私と同じ考え方や価値観をもっている人がいるだろう。	被	.54	-.06	.01	.14
iba_u2_d_8 大学には, 私を受け入れてくれる人がいるだろう。	被	.53	-.02	.07	.14
iba_u2_b_4 大学にいと, 誰かと一緒にいることができるだろう。	被	.49	-.3	-.07	.07
iba_u2_e_5 大学では, 私は頼りにされているだろう。	有	.46	-.08	.16	-.05
【Ⅱ. 自己疎外感】					
iba_u2_f_5 大学では, 私はまわりの人の輪になかなか入っていないだろう。	疎	.05	.79	-.14	.05
iba_u2_c_5 大学では, 私は一人ぼっちの感じがするだろう。	疎	-.16	.78	.03	.07
iba_u2_a_7 大学にいと, 私は自分だけ孤立している感じがしているだろう。	疎	-.07	.78	-.06	.02
iba_u2_f_10 大学では, 私はまわりの人から受け入れられていない気がするだろう。	疎	-.09	.62	.07	-.09
iba_u2_b_9 大学にいと, 私は無視されている感じがするだろう。	×	.02	.61	.08	-.20
iba_u2_d_1 大学には, 私の居場所がないと感じているだろう。	疎	-.17	.56	.00	-.16
iba_u2_c_8 大学にいと, 私はさびしさを感じているだろう。	疎	-.05	.50	-.30	.03
iba_u2_b_3 大学では, 私はまわりの人から必要とされていないような気がしているだろう。	×	-.10	.49	.00	-.23
iba_u2_f_1 大学にいと, 私はまごつくことが多いだろう。	疎	.06	.48	-.18	-.10
iba_u2_f_8 大学にいても, 私は自分らしさを出せていないだろう。	疎	.07	.47	-.26	-.08
【Ⅲ. 精神的安定感】					
iba_u2_e_1 大学にいと, 私はくつろげているだろう。	精	-.06	.05	.78	.08
iba_u2_a_5 大学にいと, 私はリラックスできているだろう。	精	.11	-.01	.77	-.03
iba_u2_c_9 大学にいと, 私は居心地がいいだろう。	精	.02	-.16	.71	.06
iba_u2_c_3 大学にいと, 私は安心できるだろう。	精	.09	-.12	.65	.05
iba_u2_d_5 大学にいと, 私はほっとできているだろう。	精	.07	-.04	.65	.10
iba_u2_c_7 大学では, ありのままの私を出しているだろう。	精	.09	-.29	.58	-.14
iba_u2_c_1 大学では, ありのままの私でいることができるだろう。	精	.19	-.2	.57	-.10
iba_u2_b_1 大学にいと, 私は幸せを感じているだろう。	精	.24	.14	.51	.26
iba_u2_d_6 大学にいと, 私は自分自身を実感できているだろう。	×	.12	.02	.45	.24
iba_u2_e_7 大学にいと, 私は生き生きとしているだろう。	精	.20	.02	.45	.30
iba_u2_c_10 大学では, 私は心から泣いたり笑ったりしているだろう。	精	.20	-.22	.44	-.08
iba_u2_f_7 大学に, 私は満足しているだろう。	×	.03	-.01	.43	.39

表のつづき

	(a)	I	II	III	IV
〔IV. 自己没入感〕					
iba_u2_d_7 大学にいても、私は何もすることがないだろう。	* 没	.07	.17	.09	-.73
iba_u2_f_4 大学では、私は自分の好きなことができているだろう。	没	.03	.06	.18	.55
iba_u2_f_2 大学にいと、私はやりがいを感じているだろう。	没	.12	.08	.21	.55
iba_u2_f_3 大学にいても、私には得るものがないような感じがしているだろう。	* 没	.09	.26	.04	-.55
iba_u2_d_10 大学では、私自身を見つめることができていないだろう。	* 没	.07	.12	-.03	-.54
iba_u2_e_9 大学にいても、私は何をしてよいか分からないだろう。	* ×	-.07	.20	.05	-.50
iba_u2_b_2 大学では、私は何かに夢中になっているだろう。	没	.08	.09	.23	.49
〔因子間相関〕					
	II	****	-.58	.65	.48
	III		****	-.52	-.44
	IV			****	.53

N=413

初期因子固有値>1.64; 初期説明率57.03%

 $\chi^2_{(737)}=1504.58, p=.001$

(a): 岸・諸井(2011)との対応く I. 被受容感; II. 精神安定感; III. 自己疎外感; IV. 自己没入感; V. 自己有用感

*: 因子概念と逆の項目

表1-d 諸尺度の検討と尺度得点に関する記述的特徴

	平均値 *	標準偏差値	相関値 ^(a)	信頼性 ^(b)	正規性検定 ^(c)
高校2年次の自尊心	2.51	0.54	.43 ~ .60	$\alpha=.84$	0.06, $p=.001$
〔対応のあるt検定<対2.5>〕 $t_{(412)}=0.26, ns.$					
〔高校2年次の過剰適応傾向〕					
I. 自己抑制	2.68 c	0.63	.50 ~ .73	$\alpha=.87$	0.07, $p=.001$
II. 他者配慮	2.80 b	0.54	.39 ~ .56	$\alpha=.72$	0.09, $p=.001$
III. 人からよく思われたい欲求	3.02 a	0.56	.48 ~ .61	$\alpha=.73$	0.15, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕 $F_{(1.88/773.10)}=54.33, p=.001^{(d)}$					
〔大学2年次の居場所感覚期待〕					
I. 自己受容感	2.87 b	0.47	.57 ~ .76	$\alpha=.93$	0.08, $p=.001$
II. 自己疎外感	1.98 c	0.54	.58 ~ .78	$\alpha=.91$	0.10, $p=.001$
III. 精神的安定感	2.89 b	0.54	.65 ~ .81	$\alpha=.94$	0.10, $p=.001$
IV. 自己没入感	3.13 a	0.49	.52 ~ .66	$\alpha=.83$	0.09, $p=.001$
〔反復測定分散分析〕 $F_{(1.54/632.77)}=393.43, p=.001^{(d)}$					

N=413

(a): 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値(すべて $p<.001$)

(b): Cronbach の信頼性係数 (c): Kolmogorv-Smirnov の検定に対するLilliefors の修正値

(d): Greenhouse-Geisser の検定

* 異なる英文字は有意に異なることを表す($p<.05$, Bonferroni の方法)

表2 諸測度の平均値に関する学科間比較

		平均値 *	標準偏差値
高校2年次の自尊心	人間生活学科	2.48	0.55
	社会システム学科	2.51	0.54
	現代こども学科	2.53	0.53
【一元配置の分散分析】		$F_{(2/410)}=0.17, ns.$	
【高校2年次の過剰適応傾向】			
Ⅰ. 自己抑制	人間生活学科	2.57	0.62
	社会システム学科	2.71	0.66
	現代こども学科	2.73	0.56 $F_{(2/410)}=2.10, ns.$
Ⅱ. 他者配慮	人間生活学科	2.81 ab	0.51
	社会システム学科	2.73 b	0.55
	現代こども学科	2.94 a	0.49 $F_{(2/410)}=5.71, p=.004$
Ⅲ. 人からよく思われたい欲求	人間生活学科	2.99	0.53
	社会システム学科	3.02	0.60
	現代こども学科	3.05	0.50 $F_{(2/410)}=0.22, ns.$
【多変量分散分析】		$Pillai$ のトレース: $F_{(6/818)}=2.84, p=.010$	
【大学2年次の居場所感覚期待】			
Ⅰ. 自己受容感	人間生活学科	2.86	0.49
	社会システム学科	2.86	0.46
	現代こども学科	2.90	0.47
Ⅱ. 自己疎外感	人間生活学科	2.08	0.59
	社会システム学科	1.98	0.51
	現代こども学科	1.90	0.57
Ⅲ. 精神的安定感	人間生活学科	2.82	0.59
	社会システム学科	2.88	0.52
	現代こども学科	2.95	0.53
Ⅳ. 自己没入感	人間生活学科	3.07	0.53
	社会システム学科	3.10	0.48
	現代こども学科	3.25	0.46
【多変量分散分析】		$Pillai$ のトレース: $F_{(8/816)}=1.87, ns.$	
人間生活学科 $N=89$; 社会システム学科 $N=219$; 現代こども学科 $N=105$			
*: 異なる英文字は互いに有意に異なる($p<.05$; Bonferroniの法)			

ごとの分析によると「Ⅱ.他者配慮」のみで有意な傾向があった。「社会システム学科<現代こども学科」の有意差があり、人間生活学科が中間に位置していた。キャンパスの効果(諸井ら, 2015; 湯之上・諸井, 2016)よりも当該学科の特性を反映していた。

高校2年次の自尊心, 高校2年次の過剰適応傾向, および大学2年次の居場所感覚期待の関係

「高校2年次の過剰適応傾向⇒高校2年次の自尊心⇒大学2年次の居場所感覚期待」の影響図式を検討するために、共分散構造分析(*Amos22.0.0*)を試みた。なお、諸測度間のピ

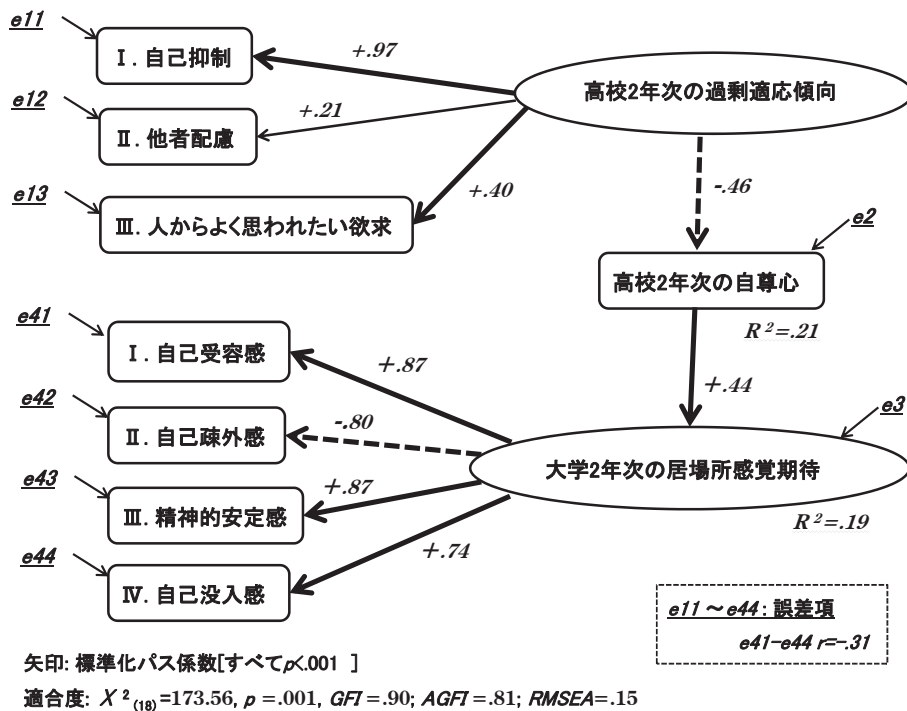


図1 高校2年次の過剰適応傾向、高校2年次の自尊心、および大学2年次の居場所感覚期待
— 共分散構造分析(Amos22.0.0, 最尤推定法)による因果分析($N=413$)—

アソン相関値を付表2に示す。

潜在変数として「高校2年次の過剰適応傾向」と「大学2年次の居場所感覚期待」を設定し、それぞれの下位尺度得点を観測変数とした。また、高校2年次の自尊心についてはそのまま観測変数として用いた。影響関係の方向は、「高校2年次の過剰適応傾向⇒高校2年次の自尊心」と「高校2年次の過剰適応傾向/高校2年次の自尊心⇒大学2年次の居場所感覚期待」とした。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た(図1)。なお、 GFI は.90を上回っているものの、 $AGFI$ がやや低く、 $RMSEA$ も.10を越えており、この解は今後も検討の必要があるといえる。

まず、2つの潜在変数と観測変数との関係を確認しよう。「高校2年次の過剰適応傾向」では3観測変数すべてが正の係数を示したが、「大学2年次の居場所感覚期待」では否定的状態を表す「II. 自己疎外感」に対する係数が負で

あった。次に、全体的傾向を読み取ろう。高校2年次の過剰適応傾向の高まりは、高校2年次の自尊心を抑制するが、大学2年次の居場所感覚期待とは無関係である。また、高校2年次の自尊心の高まりは、大学2年次における肯定的な居場所感覚の期待につながる。

IV. 考察

本研究では、大学新生が今後の大学生活での居場所感覚をどのように期待するかを調べ、新たな環境に移行する前に過ごしていた環境での過剰適応傾向や自尊心の働きを検討した。その際、3つの仮説を設けた。

「高校2年次の過剰適応傾向⇒高校2年次の自尊心⇒大学2年次の居場所感覚期待」の影響図式に基づき、共分散構造分析(Amos22.0.0)を実施した。この分析によって得られた最終モデルでの影響構図は、3つの仮説と一致していた。高校2年次の過剰適応傾向は、高校2年次

の自尊心に負の影響をもたらしているが(仮説Ⅰ)、大学2年次の居場所感覚期待とは無関係であった(仮説Ⅱ)。仮説Ⅰは、大学という同一環境での過剰適応傾向と自尊心との関係を検討した諸井ら(2015)や湯之上・諸井(2016)による知見から導かれた。また、仮説Ⅱについては、当該環境に直面した時に喚起された過剰適応傾向は、新たな環境に持ち越されないという本研究での考えに基づき、設けられた。つまり、諸井ら(2015)や湯之上・諸井(2016)の場合には、大学という同一の環境での過剰適応傾向と居場所感覚の関係を対象としている。そのため、過剰適応傾向の持続性があり、居場所感覚に負の影響が生じるはずである。したがって、本研究での仮説Ⅱに対する支持は、過剰適応傾向における環境特有の一過的側面の考えを実証したといえよう。

次に自尊心の影響に関する仮説Ⅲについて述べよう。本研究では、仮説通り、高校2年次の自尊心の高さは大学2年次の居場所感覚期待に正の影響を示した。これは、先述したように、高校2年生の頃に抱かれていた自尊心は、大学という新たな環境に移行する際にも持ち越されていることを示している。つまり、新環境への適応時期には、新環境に持ち込まれた回答者固有の自尊心の高さがその後の肯定的な居場所感覚期待を喚起させるのである。

わが国における過剰適応傾向に関する研究は、学校社会での不登校や「キレル」現象などの問題症状を「いい子・よい子」として外見的に振る舞う自己呈示上の病理として臨床的に扱われ始めたことが契機になり取り組まれるようになった(大竹・五十嵐, 2005)。本研究の結果は、大学への移行期におかれている新入生に対して次のような点で臨床的に重要であるといえる。新たな環境に直面していることによる過剰適応傾向の喚起に臨床的に注意を払うだけでなく、当該学生が高校時代にあまり高い自尊心が形成されていなければ、新環境で肯定的な居場所感覚形成を期待しない可能性がある。そのため、新環境への適応を過剰に試み、結果として肯定

的な居場所感覚を獲得できなくなるという一種の悪循環に陥る危険性がある。

ところで、本研究で中心概念の1つに設定した自尊心について、遠藤(1999)は、定常的に保持されている特性自尊心と状況に応じて変動する状態自尊心を区別する必要を指摘し、状態自尊心に関する研究の必要性を説いた。阿部・今野(2007)は、本研究で用いた Rosenberg の自尊心尺度項目を次のように改変した。もともとの項目すべてに「いま」という時間的限定をした尺度を状態自尊心尺度とした。また、「ふだん」という限定をしたものを特性自尊心尺度とした(研究1)。「職業適性テスト」課題を経験させた場合(研究2)、状態自尊心は、肯定的フィードバックを受けると上昇したが、否定的フィードバックの後では低下した。ただし、この傾向は10%水準であった。また、不安との関連を偏相関分析によって調べると(研究3)、状態自尊心は状態不安、特性自尊心は特性不安と弁別的な関連を示した。また、Heatherton & Ploivly(1991)が開発した状態自尊心尺度の和訳版の開発を試みた村上・中原(2016)は、男女大学生を対象として「乱文構成」課題によるプライミングを行ったが、状態自尊心に対する有意な影響を検出できなかった。

以上に述べたように、状態自尊心に関する測定の試みは、それ自体今後とも取り組むべき課題といえる。本研究では、①「高校2年次の過剰適応傾向⇒高校2年次の自尊心」という影響関係と②「高校2年次の自尊心⇒大学2年次の居場所感覚期待」という影響関係を中心に据えた。しかし、状態自尊心と特性自尊心に関する以上の論議を踏まえると、①での自尊心は状態的色彩、②での自尊心は特性的色彩が、それぞれ強いことになる。しかしながら、本研究での測定では、状態自尊心と特性自尊心の区別はしていない。つまり、「高校2年次の自尊心」には、その時点で一過的に生じていた成分と回答者固有の慢性的な成分が混在していることになる。したがって、本研究での仮説Ⅰや仮説Ⅲに関しては、この2種類の自尊心を測定上で区別をし

た検証が必要といえよう。

以上に述べたように、先行研究に引き続き(諸井ら, 2015; 湯之上・諸井, 2016)、大学における居場所感覚の基底にある心理学的機制的働きの実証的解明を目的とした本研究では、一定の成果が得られた。とりわけ、次の知見は重要といえる。大学という新たな環境への初期適応課題に直面している時点で、高校時代に抱かれている自尊心の水準が新環境での居場所感覚の形成期待に影響をおよぼしていた。先述した論議で中心となった特性-状態の側面の弁別的働きについては今後も実証的に明らかにすべきである。このために、例えば、孤独感に関する1年間の調査を行った諸井(1995b)が参考となる。諸井は、「ここ2週間の状態」と「この1年間の状態」という2つの基準を用いて1年間(4月から翌年1月まで5測定時点)にわたって男女大学生の孤独感を測定した。自尊心、過剰適応傾向、および居場所感覚の継時的測定を行うことによって、各水準の一過的成分と慢性的成分の弁別的効果を緻密に検討できる。

また、先行研究(諸井ら, 2015; 湯之上・諸井, 2016)に引き続き、本研究でもキャンパス規模の検討も行った。とりわけ、新環境への初期適応段階で、キャンパス規模が大学2年次の居場所感覚形成期待に影響をもたなかったことは、Barker & Gump(1964)による生態学的知見との比較からも興味深いといえよう。

今回の研究で得られた知見も踏まえながら、今後も居場所感覚の基底にある心理学的機制的働きに関する実証的解明を進めるべきであろう。

〈付記〉

- (1) 本報告は、第1著者の指導の下で第2著者の湯之上葵が修士論文のために立案・実施した研究に基づいている。第3著者の板垣美穂が追加データを収集・整理し、これらを併せてデータ分析を行った。
- (2) 2014年4月に生活環境の講義を利用して調査を実施した際には、本学嘱託講師の高桑進先生にご協力を頂いた。
- (3) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS

Statistics version 22.0.0.1 for Windows および *Amos22.0.0 for Windows* を利用した。

V. 引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 2007 状態自尊感情尺度の開発
パーソナリティ研究, **16**(1), 36-46.
- Barker, R.G., and Gump, P.V. 1964 *Big school, small school*. Stanford University Press. 安藤延男(監訳)『大きな学校, 小さな学校-学校規模の生態的心理学-』1982 新曜社
- 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**(2), 150-167.
- Heatherton, T.F., & Polivy, J. 1991 Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 895-910.
- 石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, **56**, 23-31.
- 岸可奈子・諸井克英 2011 女子大学生における居場所感覚-大学と家庭という心理的空間- 生活科学(同志社女子大学), **45**, 20-28.
- Leary, M.R., & Baumeister, R.F. 2000 The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, **32**, 1-62.
- 諸井克英 1995a 成人女性における電話による社会的支援と心理学的健康 社会心理学研究, **11**, 51-62.
- 諸井克英 1995b 『孤独感に関する社会心理学的研究-原因帰属および対処方略との関係を中心として-』風間書房
- 諸井克英・坂上舞・野島彩・岡本有美子 2015 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索-過剰適応傾向、抑うつ傾向、および自尊心との関連- 総合文化研究所紀要(同志社女子大学), **32**, 71-83.
- 村上史朗・中原洪二郎 2016 日本語版状態自尊心尺度の作成 奈良大学紀要, **44**, 119-128.
- 大竹典子・五十嵐透子 2005 思春期における過剰適応とその関連要因 上越教育大学心理教育相談研究, **4**, 151-162.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. Basic Books.
- 湯之上 葵・諸井克英 2016 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索(Ⅱ)-大学入学初期の過剰適応傾向の影響- 生活科学(同志社女子大学), **50**, 24-32.

付表1-a 高校2年次の過剰適応傾向尺度での残余項目

-
- over_h2_a_1 高校にいる時には、私は、まわりの人たちがどんな気持ちか考えることが多かった。
- over_h2_a_2 高校の中では、私は、同じ授業を受けている人たちから「能力が低い」と思われないように頑張った。
- over_h2_a_6 高校生活では、私は、親からの期待に応えないと、親に叱られそうで心配になった。
- over_h2_a_10 私は、高校で知り合った人たちの期待には応えなくてはいけないと思った。
-
- over_h2_b_5 高校の中では、私は、「自分さえ我慢すればいい」と思うことが多かった。
- over_h2_b_6 私は、高校で知り合った人たちから褒めてもらえることを考えて行動した。
- over_h2_b_9 高校にいる時には、私は、辛いことがあっても我慢した。
- over_h2_b_10 高校にいる時には、私は、やりたくないことでも無理をしてやることが多かった。
-
- over_h2_c_2 私は、親からの期待に応えるために、高校での成績をあげるように努力した。
- over_h2_c_5 高校にいる時には、私は、自分の価値がなくなってしまうのではないかと心配になり、がむしやりに頑張った。
-

付表1-b 大学2年次の居場所感覚期待尺度での残余項目

-
- iba_u2_a_1 大学では、私自身のプライバシーが守られていないと感じているだろう。
- iba_u2_a_4 大学は、私にとって居心地が悪いだろう。
- iba_u2_a_6 大学では、私だけの時間がもてているだろう。
- iba_u2_a_10 大学では、私には共感できないことが多いだろう。
-
- iba_u2_b_7 大学にいと、私は楽しいだろう。
- iba_u2_b_8 大学では、私自身のことについて考えることができていだろう。
-
- iba_u2_c_2 大学にいと、私は落ち込みがちになるだろう。
- iba_u2_c_4 大学では、私は物思いにふけることができるだろう。
- iba_u2_c_6 大学では、誰かの役に立っているだろう。
-
- iba_u2_d_2 大学には、いたくないと思っているだろう。
- iba_u2_d_3 大学には、私が役割を背負わされているものがあるだろう。
- iba_u2_d_4 大学では、私の考えや悩みを誰にも分かってもらえないと感じているだろう。
-
- iba_u2_e_2 大学にいと、私は自分を見失わないでいるだろう。
- iba_u2_e_3 大学にいと、私はストレスを感じているだろう。
- iba_u2_e_6 大学では、私の思い通りにできないことが多いだろう。
- iba_u2_e_8 大学にいと、私は安定した気持ちになっているだろう。
-
- iba_u2_f_9 大学では、私は自由な感じがしているだろう。
-

付表2 諸測定間の関係ーピアソン相関値ー

		b-1	b-2	b-3	c-1	c-2	c-3	c-4
[高校2年次の自尊心]								
自尊心		-.45 a	.02	-.11 c	.41 a	-.40 a	.31 a	.32 a
[高校2年次の過剰適応傾向]								
I. 自己抑制	b-1	***	.19 a	.39 a	-.28 a	.32 a	-.23 a	-.11 c
II. 他者配慮	b-2		***	.42 a	.07	.11 c	.00	.15 b
III. 人からよく思われたい欲求	b-3			***	.05	.15 b	.00	-.02
[大学2年次の居場所感覚期待]								
I. 被受容感. 自己有用感	c-1				***	-.68 a	.76 a	.54 a
II. 自己疎外感	c-2					***	-.70 a	-.59 a
III. 精神的安定感	c-3						***	.65 a
IV. 自己没入感	c-4							***

N=413

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$